

文久3年6月

六月廿五日 晴

寺参り。菊ヶ浜土手出来に付、諸町より出る。今日初候付、女兒色々之仕度にて出る。近所暇乞二行。

廿六日 晴

曉七ツ時過出足。前約有之、百草園にて瀬能翁を誘ひ、黄谷にて夜明ケ。織餅にて午飯少し、笹並にて同断。三田尻出役長井氏跡より被来同道ニ成。夕七ツ時過着、政事堂へ出。政府人宿三文字屋を訪、所勤方相尋候処、明倫官同様所勤可仕由。宿内政寺丁白石やえ泊る。夜渡辺辻一來ル。此日午前有風涼し、午後至て暑し。

廿七日 晴、暑し

林頭人宿荒高丁え行、同道にて宗五郎様・平六郎様御宿阿部え御伺ニ出。講習堂出勤。剣槍稽古日出人数々多有之。此日諸郡より被召出候地下獵師を狙撃隊ニ撰挙有之。来島又兵衛指揮被仰付、八拾八人京都被差登。高杉晋作指揮被仰付、五拾人赤間関え被差越候。胴腹立懸・脇差等御貸渡、火縄・玉薬等下渡相成候。旁手間取、夜に入帰宿。今日高杉御政務座と成、馬関人数百人計被残置引取被仰付候由。

国事多忙でないときは、よくその日の献立を詳細に記しているのも異色ですが、慶応元年の日記には、吉田川の土手で斬首された罪人の「腹を明け、肝を取煮て食べた」話まで、両者の実名入りで生々しく出ています。

松陰一族の行政官が
冷静かつ正確に記した
維新史の空白を埋める膨大な日記
堂々初の活字化

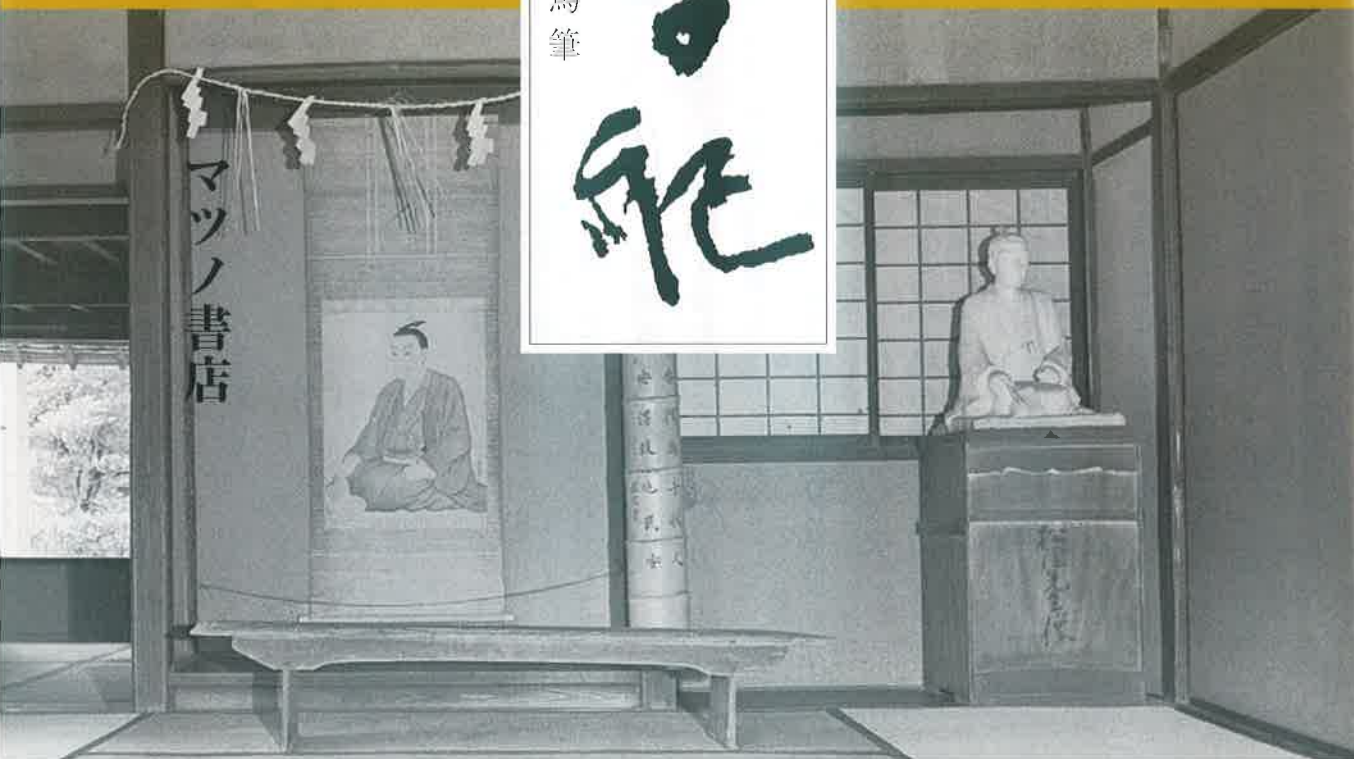
坂本龍馬の日記

坂本龍馬筆

一坂太郎・蔵本朋依校訂

三八〇部限定版

(番号入)



万延元年4月

鯨油百挺、吉田にて紙、三田尻にて塩三百五拾石とも船木五百五拾石積船にて御仕送。藤井風氣にて二日より病氣。四日雨。中村、藤井代り呉服方受渡内勘懸り。幾次腫物え蛭ヲ付る。淳信院様御百回忌御法事十一日より二日迄於水上執行内意触。五日陰。下りより小川御命日会え行。初て之引受にて酒出ス。会者祖式計。六日晴。沼田ヶ原え田螺ヲ取ニ行、午より中ノ倉小島へ家督歛ニ行。福原え兵庫より帰着歛ニ行。久坂離盃塾にて酌。七日陰、夕雨、東風、暮より雷。朝玄瑞ヲ見立ニ行、御寺参り、藤井え見舞ニ行。下り懸同役中秋村え暇乞ニ行。丙辰丸昨今乗組人数松島剛藏・高杉晋作・梅田剛吉・長嶺豊之助・平岡兵部、兩人所市右衛門・常右衛門船上乗兵七也。夜水出る。八日雨。斎藤氏祖母死去届。去年御勘定濃物方御根帳読合として上勘へ行。終夜雨。九日雨終日。父服薬大補円ヲ買フ。夜斎藤葬式ニ付弘徳寺え行。霄半鐘、水ニ近しと云。十日陰、時々雨。福原清介諸引除次座ト成。十一日雨。前田快起、出勤。十二日陰。於大照院清徳院様御法事御焼香。日参ス。昨夜久坂玄瑞より三田尻より書状到来、御船奉書不被下候付早々取計候様申来候付、於御寺聞合置。』

十三日 晴

文久2年8月

八月十五日 曇

夕叡山より夕立雨来る。朝竹内正兵衛江戸下り出足送りて蹴上ニ至る。陸山・白水・山県吉之助・村田次郎三郎合宿四人、佐々木男也・松島剛藏・杉梅太郎・福原亀太郎・藤田権右衛門・土屋蕭海其外も有之、午前帰る。暮方より曙保野茶屋え穴翁其外被行候由ニ付、榑崎氏と跡より行。園街之芸妓山猫とも殆ど十人ニ及ふ。内年間鶴三衆に秀、三絃謡声共ニ工なり。山猫之内お竹と号する物、容兒稍美なり。転法輪と号するハ其冠を付たる兒能似たるおいてなり。初更過各分散。肉翁ニ随ひ、村田・片山寛一郎と白川橋筋を通り聖護院之森ニ到り、海仙翁を訪。其路にて見月るに朦朧として返て望よし。翁家の門前ニ至る、門既に閉なり。一両声呼起せハ即ち少女小門を開き入る。翁正ニ寝ニ就んとす。大ニ喜び楼を開き先茶菓子を出す。夫より三樹之芸妓三人を呼、一名菊江、好三絃歌唱。一名小藤、上ニ同シ容貌尋常。一少妓名玉松年十三、四、面兒絶美、好舞及大鼓。於此又開宴鮮美満盤緑酒満樽三五酬酢之後、二妓彈三絃て歌ふ歌に随ひ舞袖変遷、眼光熒飄揺金扇実絶美観なり。曲曰梅の春曰女太夫先与曙保野妓四人連袖舞者比勝数百等なり。不覚移更聞、鶏鳴、驚て脩斎帰装寓ニ帰る。已ニ五更、今日之遊実ニ遨遊なり。記して他日の一笑ニ備ふ。



維新史研究に新境地を拓く 「久保松太郎日記」の刊行を喜ぶ

京都学園大学学長
京都大学名誉教授

海原 徹

松陰と机を並べ 久保松太郎は、天保三年閏十二月八日、萩藩大組士(四十九石余)久保五郎左衛門の長男として生まれる。名は久清、通称を初め清太郎、のち松太郎といったが、明治になり断三と改める。父が病身で弘化元年、四十一歳で隠居したため、十三歳の若さで家督を継いだ。吉田家とは縁戚となるが、これは松陰の叔父、のち養父となる大助が、庄屋森田家の娘久満を嫁にするさい、家柄を合わせるため久保家の養女としたことから生じたものである。外叔五郎左衛門、外弟清太郎(村塾時代は二貫してこの名前)などと松陰がいうのは、このためであるが、もちろん血縁関係はない。松太郎が生まれた頃、一家は城下土原に住んでいたが、父の隠居後は松本椎原に転居した。杉家の東、半町ほどの距離というから、すぐ近くである。松陰の叔父玉本文之進が自宅で創めた松下村塾に学び、松陰やその兄杉梅太郎らとは、机を並べた同窓である。

よく知られているように、公務で忙しくなった玉木は、間もなく松下村塾を閉じたが、この塾名を継いだのが、隠居後自宅で教えていた五郎左衛門である。野山獄を出た松陰が、一時期助教として教えたことがある。いわゆる幽室に始まった松陰自身が主宰する松下村塾は、この塾札を改めて五郎左衛門から譲り受けたものであり、安政四年春、江戸から戻った松太郎は、ここに入りしめて学んだ。師の松陰とさほど年齢が違わず、また玉木の塾の学友でもあり、弟子というよりむしろ助教的な存在であろう。間もなく始まる須佐育英館との交流のさい、助教の富永有隣と塾生十数名を引率したのは、そのことを裏書きしてくれる。

木戸孝允の片腕 ところで、松太郎はどのようなタイプの人物か。松陰が喜怒哀楽を顔に出したのを見たことがない、塾中に能弁家は多いが、むしろ寡黙な松太郎の方が重きをなしているといい、また杉梅太郎が弁舌爽やかではないが、知略に勝れ人情世故に長け、時に含蓄のある意見を述べ、啓発されることが多いと評したように、普段は極めて温和な性格であるが、ここぞという時は頼りになる一本筋の通った人物であったようだ。塾中の政治的謀議に距離を置き、あまり関係した形跡がないのは、そうした人柄と無関係ではなからう。その万事に慎重かつ大人風の姿勢は、慷慨家の多かった村塾ではむしろ異色の存在である。

おそらくその人と為りのせいと思われるが、松太郎は行政家として早くから才能を発揮している。文久三年、三十一歳の若さで船木代官に挙げられているが、その後、各地の代官や役職を歴任し、民政畑で手腕を見せている。維新後は萩藩の会計局主事に任じられたが、このポストは執政(藩主)や副執政、参政につぐ要職であり、事実上藩財政を担当した。間もなく権大参事となり、参政として藩政を指導した木戸孝允の片腕となつて活躍した。木戸が中央に去つてからも、絶えず連絡を取り合い、禄制改革や兵制改革に伴う脱隊騒動など、この時期、藩体制が直面した数々の難局に当たっている。

明治四年に発足した山口県では、中野梧二の下で権参事として勤務したが、地租改正の実施方法などでしだいに意見が合わなくなり、翌年九月、名東県の参事として転出した。間もなく権令となり、得意の民政面で手腕を発揮したが、中央政府の上意下達的な地方行政を必ずしも喜ばず、事々に対立するようになり、結果的にはこれが原因で、度会県権令へ転出した。度会県は間もなく三重県に統廃合され、久保はそのまま非職となった。地租改正の時期尚早、もしくは独自の改正案をたびたび中央へ進言していた、そのどちらかといえば民衆寄りの政治的姿勢が免官の原因であろう。上京して再挙を図ったが、西南戦争中に木戸孝允が急死したため、再び世に出ることはなかった。十一年夏頃から断三自身が病床に伏す身となり、この年十月二日に死んだ。享年四十七歳。従五位。長女サダはまだ幼く、久保家は異母弟の幾次郎が継いだ。

知られざる日記 「久保松太郎日記」は、安政三年六月、江戸勤番中に筆を起し、明治四年十二月、山口

『久保松太郎日記』は、安政三年（一八五六）六月から明治四年（一八七七）十二月に至るまでの、長州藩士久保松太郎（清太郎・断三）の日記です。

久保自身は派手な活動はないものの、親戚の吉田松陰は「外愚内明、温良にしてしかも鉄心石腸」と評し、最も厚い信頼を寄せていました。彼はつねに縁の下で力持ちという立場で、幕末長州藩の青年達、また長じては木戸孝允の片腕として、藩の体制を支え続けました。

感情移入を努めて排したというのは、別の見方をすれば、極めて冷静かつ正確な記述ということもできよう。松陰の没後、断続的にあった村塾の勉強会は、久坂玄瑞の日記や書簡などで知られるが、松太郎の日記で別の角度から検証することが可能になった。村塾で共に学んだが、その後の動静がはつきりしない塾生たちの名前が随所に登場するのも、極めて貴重であり、この日記を見ることで、これまで維新史の空白となっていた箇所が、次々と解明されることはおそらく間違いない。

久保日記の存在は、『吉田松陰全集』に一部掲載されているように、早くから知られていたが、先の大戦で原本が失われたこともあり、全文が世に出たことは一度もない。志士の活躍に二線を画した松太郎の出所進退、あまり華やかでない、いかにも地味な生涯が大方の関心を呼ばなかったのも、もう一つの理由であろう。戦前世に出た広瀬豊『松陰先生の教育力』は、この日記を豊富に利用して書かれた唯一の本であるが、日記それ自体は一般にはほとんど知られていない、歴史の彼方に忘れられた存在となっている。

その意味では、今回、マツノ書店から初めて刊行される「久保松太郎日記」は、われわれ維新史研究に携わる者はいくまでもなく、広く一般読者にも待望の書である。新進気鋭の二人の若い研究者が、満を持し正確無比の校訂を付したことも、本書の史料的価値を二層高めているように思われる。維新史研究に新境地を拓く、また一つ素晴らしい書物が世に出ることを大いに喜び、心から歓迎の言葉を申し述べたい。

（小見出しはこちらで付けさせて頂きました。マツノ書店）

『久保松太郎日記』登場人物

青木周彌 赤根武人 有吉熊次郎 飯田正伯
伊集院直衛門 伊藤博文 井上馨 入江九一
浦朝貞 遠藤謹助 大久保利通 大山巖
大村益次郎 小野為八 桂小五郎（木戸孝允）
片野十郎 榎取素彦 木梨精一郎 久坂玄瑞
口羽徳祐 国司信濃 久保無三 来原良蔵
黒田清隆 西郷隆盛 西郷従道 斎藤弥九郎
坂本龍馬 佐久間佐兵衛 佐々木男也 六戸
九郎兵衛 安戸磯 清水清太郎 品川弥二郎
白石正一郎 白根多助 周布政之助 杉孫七郎
杉民治 杉百合之助 大楽源太郎 高杉
小忠太 高杉晋作 竹内正兵衛 玉木彦介
玉木文之進 土屋蘭海 寺島忠三郎 道家竜助
時山直八 中岡慎太郎（石川誠之介）
長井雅楽 中谷正亮 中村誠一 中村道太郎
梨羽才吉 植崎弥八郎 野村素介 野村靖
林半七 広沢真臣 平岡兵部 福原越後
福原与三兵衛 福田侯平 北条瀬兵衛 前田
孫右衛門 前原一誠 正木退蔵 益田弾正
松島剛蔵 南貞助 御堀耕助 三吉内蔵助
宮城彦介 三吉慎蔵 毛利登人 山尾庸三
山県有朋 山田顕義 山田宇右衛門 吉田稔
廣 渡辺内蔵太 李家文厚 （以上く部です）

■この日記には幕末の萩や山口はもちろん、久保が地方行政官を歴任した舟木・吉田・上関・下関、さらに出張先の長崎などの様子が細かく記録されています。公務から食事の献立、健康状態、遊んだ芸妓の名前や容姿に至るまで、激動の中に生きる久保の姿が如実に反映されていて、興味は尽きません。

■もちろん、攘夷戦争、四境戦争、諸隊脱隊騒動など数々の歴史的大事件の渦中で書かれた部分や、吉田松陰・桂小五郎・久坂玄瑞・高杉晋作・坂本龍馬・中岡慎太郎等々との交流を記録した部分など、幕末維新史の史料として超一級の内容を備えていることは、言うまでもありません。

■『久保松太郎日記』自筆原本は、かつて東京の久保家に所蔵されていましたが、同家が昭和二十年（一九四五）に戦災に遭った際、他の史料と共に灰燼に帰してしまいました。しかし幸いなことに、大正の頃、公爵毛利家編修所スタッフにより筆写された「久保松太郎日記」十一冊が、山口県文書館毛利家文庫中に残されていたので、これを基に今回刊行が実現しました。

■他に類を見ない幕末維新史料であり、しかも『吉田松陰全集』に抄録されて、その重要性は高く評価されているにもかかわらず、不思議なことに、これまで一度もその全貌が公刊されることはありませんでした。内容を一覧されれば、これほどの史料が眠っていたことに、誰もが驚きの声を上げることでしょう。

■ご存じの通り、新組の史料集は頁あたり二〜三十円が常識なのに、本書は一人でも多くのお方に読んで頂くため、あえて超特価に挑戦しました。

■これからの幕末維新史研究に不可欠になることは間違いない『久保松太郎日記』。稀覯本とならないうちに、ぜひお求め下さい。

■体 裁 A5判 八九〇頁

上製クロス装箱入

■定 価 一万五千元

（税込・〒450円）

■出版部創設三十周年記念特価

一万円（税・〒込）

■特価締切 平成15年11月末

■発 売 16年1月下旬

限定三八〇部（番号入）

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

周南市銀座2-13
〇八三四二二九五

マツノ書店